

国連子ども特別総会

渡 邊 奈美子

(国際子ども権利センター、明治学院大学国際学部4年)

「私たちにふさわしい世界を。」
「あなたは私たちを未来と呼ぶけれども、
私たちは現在でもあるのです。」

これは、世界中から集まった子どもたち¹⁾から発せられたメッセージである。²⁾

2002年5月8日から10日、ニューヨーク国連本部にて国連子ども特別総会（以下特別総会）が開催された。当初この会議は2001年9月19日から21日におこなわれる予定であったが、米国で起きた9月11日の悲惨な事件によって延期を余儀なくされた。まさにこれから子どもたちのために平和な世界を創ろうとしているときにこの事件がおき、会議が延期され、アフガニスタンへの攻撃が開始されたのは、皮肉としか言いようがない。なぜならば、子どもにふさわしい世界を創ることがいかに困難であるのか、そしてそのために我々はいつそうの努力をしていかなければならないことを9・11事件は物語っているからだ。

子どものための世界サミットから国連子ども特別総会へ

13年前の1990年9月、「子どものための世界サミット」が開催され、世界の指導者たちは、子

どもたちによりよい未来を創ることを約束した。このサミットが開催された背景には、2つの重大な点がある。ひとつは、毎日何万もの子どもたちが栄養不良や病気などで死亡し、また一億人以上の子どもが学校に行くことができないでいるという「静かな破局」であり、もうひとつは、この静かな破局に終止符を打つための手段が今や世界にあり、資源的にもそれを活用できるようになっているという事実である。³⁾ サミットには、71カ国の首脳を含む152カ国の代表が集結し（当時の海部俊樹首相を含む）、「子どもの生存、保護及び発達に関する世界宣言」にて「子どもの福祉には最高レベルの政治行動が必要である。我々は断固としてこの行動を取る決意である。」と宣言した。そして1990年代における子どもの生存、保護及び発達に関する世界宣言を実施するための「行動計画」では、2000年までに達成すべき7つの目標を中心に27の目標が掲げられた。⁴⁾

だが、果して約束は守られたのであろうか。結果は読者の知るところである。世界を見渡すといまだに多くの子どもが飢えや病に苦しんでいる。1990年からの10年間の進展をふりかえった国連事務総長報告書“ We the children ”で、コフィ・アナン氏は以下のように語っている。「世界は『子どものための世界サミット』の目標のほとんどを達成することができなかった。」「多くを望みすぎ

たわけでも、技術的に到達できないことだったわけではない。大半は、十分な投資がなされなかったため、実現できなかった。」⁽⁵⁾

国連子ども特別総会概要

国連子ども特別総会は、この「子どものための世界サミット」で採択された「宣言」及び「行動計画」の達成状況を見直し、今後10年間の子どもの関する新たな行動計画をつくることを目的に開催された。今回、主なテーマとなったのは、1) 健康的な生活の促進、2) 質の高い教育の提供、3) 虐待・搾取・暴力からの保護、4) HIV/AIDSとの闘いの4点である。これらを討議し、解決への道を探るための公式プログラムは、以下の3つから構成されていた。1) 本討議（総会会議場で各国政府・国際機関・NGOなどが演説をおこなう）、2) アドホック会議（本会議で発言しない国際機関や一部NGOが演説をおこなう）、3) 3つのラウンドテーブル（各国代表が自由な意見交換をおこなう）。また開催前日の7日には、子どもと武力紛争を議題とした安全保障理事会が開催された。さらに、国際機関やNGOが主催する特別総会関連イベント（サポーターイベント）も公式プログラムと並行して開催された。

国連子ども特別総会の特徴

今回の会議の特徴として、前回のサミットを上回る規模とおとなと子ども含めた幅広い層からの参加が挙げられる。世界から約6000人もの人々が集まり、子どもを取り巻く様々な課題について連日熱い議論が交わされた。187カ国から政府代表団が派遣され、うち65カ国からは、首脳級が出席した。日本からは、遠山敦子文部科学大臣を首席代表とし、有馬真喜子総理個人代表、横浜市長、NGO、二人の子どもを含む45人が政府代表団として参加した。NGOからは、おとな・子どもも含め119カ国から700団体、1600名を越える参加が

あった。⁽⁶⁾ また、会議に先立ち開催された「子どもフォーラム」には374名の子どもが参加した。また、子どもにふさわしい世界を創るために様々なリーダーシップが必要とされており、世界の宗教指導者の参加や企業関係者の参加もあった。

子どもの参加

今回の会議で注目すべきは、子どもの参加である。国際会議の場において、子どもが「ゲスト」としてではなく、おとなと同じ正式な代表として対等な立場で会議に参加し、メッセージを発信したことは、特別な意味を持つ。なぜなら、今まで子どもは、社会の構成員であるにも関わらず、その声は聴かれず、無視されてきた存在であるからだ。この会議は、子どもが声をあげることが出来た機会といえよう。

特別総会における「子どもの参加」は様々な方法で実現された。1) 子どもフォーラムへの参加、2) 特別総会に向けた準備会合への参加、（合計3回の準備会合が開かれたが、3回目の会合において140名の子どもの参加があった。）3) 特別総会での子ども参加、4) ユニセフホームページでの投稿を通しての参加、5) 子ども記者としての参加。ここでは、これらのうちのいくつかを紹介する。

子どもフォーラムは、特別総会に先立ち、18歳未満の子どもを対象として開かれた3日間の会議である。⁽⁷⁾ マスコミやおとなを一切入れず、非公開で行なわれたこの会議には、世界から374名の子どもたちが参加した。（うち239人は132ヶ国からの政府代表であり、残りの135人はNGO代表である。）子どもたちはこの会議で、グループ別にわかれ、総会開会式で発表する「私たちにふさわしい世界 A World Fit for Us」というメッセージを作成したり、シンポジウムなどのスピーカーを決めるなどした。

特別総会における子ども参加では、子どもが会

議に「参加」することができるよう様々な工夫が至る所でなされていた。子どもたちはスピーカーとして、自分の労働や武力紛争の経験、NGO活動の経験などを語ったり、あるいは傍聴者として様々なイベントに参加した。サポーティングイベントでは子どもたち自身が司会を務めたものや、18歳未満の子どもだけに開かれた会合もあった。そこでは、子どもに分かりやすいように、大切なことは紙に書き各国語で壁に貼るなど、言葉の壁を超えて、子どもが内容を理解できるように配慮がなされていた。このような子どもへの配慮は、国連公用語が母国語ではない我々外国人にとっても同様に助けとなるものであった。

その中で注目すべきは、公式プログラムでの子どもたちの発言である。これらは記録に残され、今後子どもがおとなのパートナーとして対等な立場で会議に参加する力があることの証明となろう。総会開会式では、子どもフォーラム参加者を代表して、2人の子どもが国連史上初めて演説をおこなった。「私たちにふさわしい世界 A World Fit for Us」を発表し、以下のように述べた。「私たちにふさわしい世界は、すべての人にふさわしい世界です。」「私たちは問題の根源ではなく、それらを解決する主体です。」「私たちはただの子どもではありません。私たちは人間であり、地球市民です。」⁽⁸⁾ さらに、前日に開かれた安全保障理事会では、ボスニア・ヘルツェゴビナ、リベリア、東ティモールから来た子どもが、自らの紛争の体験を語った。安全保障理事会で子どもが発言するのは史上2回目である。

このように、特別総会では子どもの声を聴こうとするおとなの姿勢が随所で見られた。しかしながら、子どもに対する配慮があった一方で、全く子どもに配慮せず、おとなだけで話が進んでしまった会合があったことは否めない。例えば、現地語しかわからない子どもに対して、付き添い人の通訳を待たずに、議論が進んでしまうような場面も

あり、その子どもは会議の内容を理解することができなかった。この特別総会は、子どもの権利条約に基づいた会議であるにも関わらず、「子どもの最善の利益」という原則がしばしば忘れられてしまっていたようだ。

子どもたちにふさわしい世界 A World Fit For Children

特別総会で採択された文書の「子どもたちにふさわしい世界」(A World Fit For Children) という名称は、世界・社会の現状やニーズに子どもが合わせるのではなく、世界が子どもに合わせなくてはならないことを意味した象徴的なものである。

成果文書の構成は以下のとおりである。

- ． 宣言
- ． 進展および得られた教訓の振り返り
- ． 行動計画
 - A. 子どもにふさわしい世界の創造
 - B. 目標、戦略および行動
 - (a)健康的な生活の促進
 - (b)良質な教育の提供
 - (c)虐待、搾取および暴力からの保護
 - (d)HIV / エイズとの闘い
 - C. 資源の動員
 - D. フォローアップの行動および評価

ARC (Action for the Rights of Children) 代表平野裕二氏の分析によると、この成果文書には、子どものための世界サミットの宣言および行動計画と比較したときに3つの点で拡大が見られる。⁽⁹⁾ 1) 子どもの「生存、保護および発達」に焦点が当てられていたサミットの宣言・行動計画に比べ、対象分野が拡大した。特に、特に困難な状況にいる子どもと、子ども参加について大幅な前進が見られた。2) 対象年齢層が拡大した。サミットの宣言・行動計画では、乳幼児期と児童期の子どもに焦点が当てられており、思春期の若者に対する配慮はほとんどみられなかったが、今回

は18歳未満の子ども全体が対象となった。3) パートナーシップの強化と、すべての人の協力が不可欠であることが強調されている。特に、思春期の若者を含む子どもがパートナーとして最初に挙げられているのは重要である。その他、親をはじめとする養育者、地方自治体、議会議員、NGO・コミュニティ組織、民間セクター・企業、宗教的・精神的・文化的指導者および先住民の指導者、マスメディア、地域機関・国際機関、子どもと直接接して働く人々が子どもにふさわしい世界を創るキーパーソンとして挙げられている。

子どもとの協働に向けて

成果文書で採択された新たな目標を実行していくためには、様々なパートナーシップが欠かせない。特別総会での子どもたちの活躍を見れば明らかであるように、子どもは決して未熟な存在ではなく、おとなと共に社会を創っていく「パートナー」である。子どもたちが「子どもにふさわしい世界は、すべての人にふさわしい世界です。」と述べたように、今こそ、おとなと子どもが共に手を取り合って世界を変えていく時である。

確かにこの会議は、子どもをおとなと共に社会を創る対等なパートナーとして認識することを促進した。だが、会議場で子どもの声が聴かれても、それが現場でどうなっているかという課題が残る。現場レベルで、いかに子どもの声に耳を傾け、「すべての人にふさわしい世界」を創っていくかが今後の課題である。

参考

UNICEF本部 国連子ども特別総会ホームページ

www.unicef.org/specilassession/

平野裕二「国連子ども特別総会報告」、クレヨンハウス

『月刊子ども論』2002年8月号、6-20頁

子どもの人権連 『いんぷおめーしょん 子どもの人権連』80号2002年6月、2-4頁、81号2002年7月号

ユニセフ 『世界子供白書1991』

国際子ども権利センター 『子夢子明』40号 2002年夏号、2-6頁

国際子ども権利センター www.jca.apc.org/jicrc

外務省 http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/jido/children_gh.html

註

- (1) 子どもとは、国連子どもの権利条約（1989年採択）の定義に基づき18歳未満のすべてのものをさす（第1条）。
- (2) 国連子ども特別総会
www.unicef.org/specilassession/ A World Fit for Us（筆者訳）
- (3) ユニセフ 『世界子供白書1991』 2-3頁
- (4) 日本ユニセフ協会 ホームページ
www.unicef.or.jp/gmc/kok_bod.htm 2002年6月11日
- (5) 子どもの人権連 『いんぷおめーしょん 子どもの人権連』 No.79 2002年5月号、2頁
- (6) 筆者もユニセフと協力関係にあるNGO、国際子ども権利センター（代表 甲斐田万智子）からの代表4名のうちの1人として、3人の若いメンバーと共に会議に参加した。
- (7) 正式には、2001年9月の会議の時点で18歳未満だった者なので、この会議の時点では18歳の者も含まれている。
- (8) A world fit for us www.unicef.org/specialsession
訳は筆者によるもの。子どもたちは、子どもだけにふさわしい世界ではなくすべての人にふさわしい世界を望み、「私たちにふさわしい世界」とメッセージを名づけた。
- (9) 平野裕二「国連子ども特別総会報告」、クレヨンハウス 『月刊子ども論』2002年8月号、16頁